

公共施設におけるユニバーサルデザイン設計のプロセス その1

正会員 中本 俊也*
同 高橋 儀平**

ユニバーサルデザイン 市民参加 福祉施設
ワークショップ 公共施設 プロポーザル

1. 経緯と目的

2005年4月から5月にかけて「(仮称)ぬまづ健康福祉プラザ」のプロポーザルが行われた。プロポーザルの概要と設計コンセプトを表1に示す。

本論は、プロポーザルによって選定された設計者と、その後の設計段階においても設計者と共に市民参加の設計プロセスに関わった審査員が、公共施設におけるユニバーサルデザイン(以下、UD)設計のプロセスを報告するものである。今後、建設過程や完成後の運営や利用状況についても継続的にUD設計のプロセスと成果を調査・分析する。

そして、設計段階から開館後の運営までを俯瞰することで、市民参加の設計が「公共施設におけるUDの実践」に対してもたらす効果と、その問題点を考察することを目的とする。長期的な視座からUD設計のプロセスを考察することを前提に、本報告をその1と題した。

2. 設計のプロセス

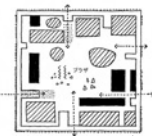
図1のように、設計工程は公共施設の設計としては短期間であった。しかしながら、市担当部署の積極的な推進と、05年6月に発足した利用・運営検討会議のメンバー(市民有志)の協力により、短期間に効率よく市民との対話やワークショップ(以下、WS)を開催することができた。

市民との対話にあたっては、初めて出会う市民同士や市民と設計者の間に共通認識を築くために、平易な言葉遣いを心がけた。参加者の共通基盤とすべくUDのポイントとして、表2のキーワードを掲げると共に、利用・運営検討会

議メンバーと設計者が近隣市の類似施設を合同視察し、共通体験を通じて、その長所や短所について意見交換した。

三ヶ月弱の基本設計期間でプロポーザル提案の基本コンセプトに対する市民の理解を得ながら、市民の要望や希望を計画に取り込んだ。基本設計半ばの8月前半に集中的に行われた市民意見交換(WS01~03)と、総括的な議論の場としての第2回利用・運営会議を経て、基本設計内容がほぼ決定し、その後の第3回で中間報告、第4回で基本設計をまとめた。また、第5回では実施設計の結果を市民に報告し、第6回では建設段階で検討すべきテーマについて意見交換を行った。表3にそのプロセスをまとめた。

表1 プロポーザルの概要と設計コンセプト

プロポーザルの概要		設計コンセプト
目的	福祉・保健・医療の連携による地域福祉活動と健康づくりの拠点	オープンプラン フランクな自由空間を提案し、大胆な交流を発生させる。求められる各施設間にインタラクティブな関係性を発生させる。
期間	2005年4月28日~5月18日 公開ヒアリング 5月23日	
参加者	8社	活動が透けて見える。
課題	基本機能を達成するための施設配置 環境・景観・コスト・デザインの提案 UDの提案・市民参加設計	限定的な機能空間を設定せず、誰もが気軽に利用できる。
審査員	長谷川逸子(委員長) 平田厚(副委員長) 高橋儀平・三谷徹・清水忠	 余白を持つ空間モデル

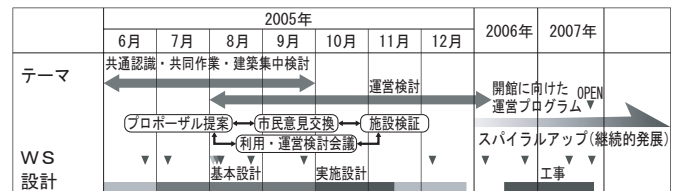


図1 設計工程

表2 UDのポイント

公平性と柔軟性	市民・利用者が中心	わかりやすい・使い易い
単純性・直感性 空間認識が容易	思いやりのある人的対応	中が見える
柔軟性 ユーザーに応じた空間利用が可能	運営ソフトの充実	大きな文字のサイン
公平性 だれもが公平に利用できる	ボランティアバイの設置	光・色・素材による空間のわかりやすさ
安全性 事故や災害から生命を守る	コミュニケーションを大切にされた運営	X軸、Y軸のストリート+床サイン

表3 設計のプロセス

2005年5月23日 プロポーザル提案 公開ヒアリング	2005年6月24日 第1回利用・運営 検討会議	2005年7月6日 検証: 類似施設視察	2005年8月3~5日 市民意見交換 (ワークショップ)	2005年8月8日 第2回利用・運営 検討会議	2005年8月29日 第3回利用・運営 検討会議	2005年9月30日 第4回利用・運営 検討会議	2005年12月12日 第5回利用・運営 検討会議	2006年3月15日 第6回利用・運営 検討会議
活発な質疑があり、提案の可能性や魅力について討議提案への課題もまとめられる	プロポーザル提案内容について説明各委員意見を聞く今後の進め方確認	3つの類似施設を視察し、その内容について意見交換を行う 共通認識を築いた	模型を使ったわかりやすい説明中学生も参加し、活発な意見交換	さまざまな年齢層が参加する利用・運営検討会議 活発な意見交換と大切なコーディネート	今までの意見をまとめ、計画にどう反映されたか模型を使って説明し、再検証	基本設計まとめ	実施設計経過説明	設計のまとめ運営骨子の説明建設段階イメージ
(主な意見) ・福祉活動を吸収し、逆提案できる対応能力が期待できる。	(主な意見) ・地域福祉活動が地域とどう接していくかを考えたい。	(主な意見) ・相談機能を充実させたい。	(主な意見) ・運営開始後も市民の評価や要望を確認できるシステムが必要。	(主な意見) ・トイレ内に広めのブースがほしい。	(主な意見) ・外部のテラスでミニコンサートをやってはどうか。	(主な意見) ・自主企画運営なども積極的に検討していきたい。	(主な意見) ・情報の発信基地として各地区センターと連携できるとよい。	(主な意見) ・工事段階でも、現委員が積極的に関わってほしい。
								

3. 設計過程におけるスパイラルアップ

WSや利用・運営会議においては、各階1/100内部模型が、市民の空間把握に対して大きく寄与した。また、本計画におけるWSは利用・運営会議の分科会として、多様な意見を吸い上げる場として機能した。設計者としてのスタンスは、実現可能なものはすべて設計に盛り込み、技術的あるいは工事予算の関係で実現が難しいものについては、その理由を説明し、計画全般に対する市民の理解度を高めることを心がけた。市民との対話の中で出た主な意見を表4に示す。

プロポーザル段階の提案はオープンプランの自由な活動空間であった。市民交流の場を部屋の中に限定しないという考え方について、当初、一般的な廊下でつながる諸室を思い描く市民の中には疑問を示す人もいたが、「この空間で何ができるか」を参加者全員で考え、意見交換することで、閉館後の柔軟な運営を視野に入れた議論ができた。

また、審査員として関わった学識経験者が、設計段階にも参画し、要所で客観的な示唆を行い「建築から地域福祉への発展」の可能性を述べることにより、局所的あるいは即物的な議論に陥ることなく、円滑な市民参加を実現した。

図2では、プロポーザル提案の空間構成が市民との意見交換によって変遷した一例を示す。図右側の立体駐車場からの円滑な動線の整理や、活動が透けて見えるオープンプランの構成を保持しつつ、個別活動を保障する部分的に閉じた部屋を設置することなどが、設計に盛り込まれた。

実施設計完了段階の第6回利用・運営検討会議(06年3月)で設計結果を市民に報告した。また、市主催の「(仮称)ぬまづ健康福祉プラザの役割とこれからの地域福祉」と題したシンポジウムが開催され、総括議論を経て設計段階における市民参加の成果を運営へと継承することとした。

4. 今後の課題と展望

本報告では実施設計完了時点までの推移を述べた。多くの人に関わった公共施設におけるUD設計のプロセスで市民参加がもたらす効果を表5にまとめた。また、今後の課題としては以下のことが考えられる。

- ・ 工事段階における運営プログラム検討の継続
- ・ 工事段階における市民要望の変更を含む設計対応
- ・ 色彩やサイン計画における市民参加
- ・ 建築空間の把握がしづらい利用者への説明と対応
- ・ 若者の運営参加、世代間の交流プログラムの構築
- ・ ホームページなどによるリアルタイムの情報公開

今後のスケジュールは06年7月着工、07年秋開館の予定である。設計監理段階においても市民との対話を継続し、上述の課題に取り組む。

本論は長期的な視座からUD設計のプロセスに市民参加がもたらす効果を考察するものであり、最終的には施設開館後の利用運営状況も調査・分析し、実例を通して報告するものとした。

表4 設計過程におけるスパイラルアップ

意見	→ 施設計画への反映	→ 運営検討へ継続
会議室が少ないがオープンスペースの方が安心して会議が行える。利用者同士の交流もはかされてよい。	オープンとクローズな会議室を設置。利用形態により選択が可能につくり。	有効な利用方法を継続して検討。
若者を引き込む施設としたい。	若者が入りやすい、外部から活動が見えるギャラリーやカフェを設置。	若者の参画について運営・企画検討を継続。
障害者対応の案内設備を充実してほしい。	すべてハードに頼らずソフト対応も重要。ボランティアアベイ等を設置。	ガイドボランティアや受付ボランティアなどを検討。
プラザが情報の発信施設となるとよい。各地域にある地区センターと連携ができることよい。	ふれあいギャラリーや、情報ギャラリー、掲示スペースを各階に設置。	全館の情報を総合的に考える情報委員を検討。地域連携。
災害時の避難、安全性について、しっかりと考えてほしい。	一時避難に有効なバルコニーや外部テラス、屋上広場を配置。	防災委員の設置、日常の防災訓練等を運営にて継続検討。
5階のふれあい交流室は、親と子供の交流ができ、食事を広げられるようなスペースも考えてほしい。	オープンな交流室の一角に給湯設備等のあるユティリティスペース。	ふれあい交流室の利用方法、企画等を継続して検討。

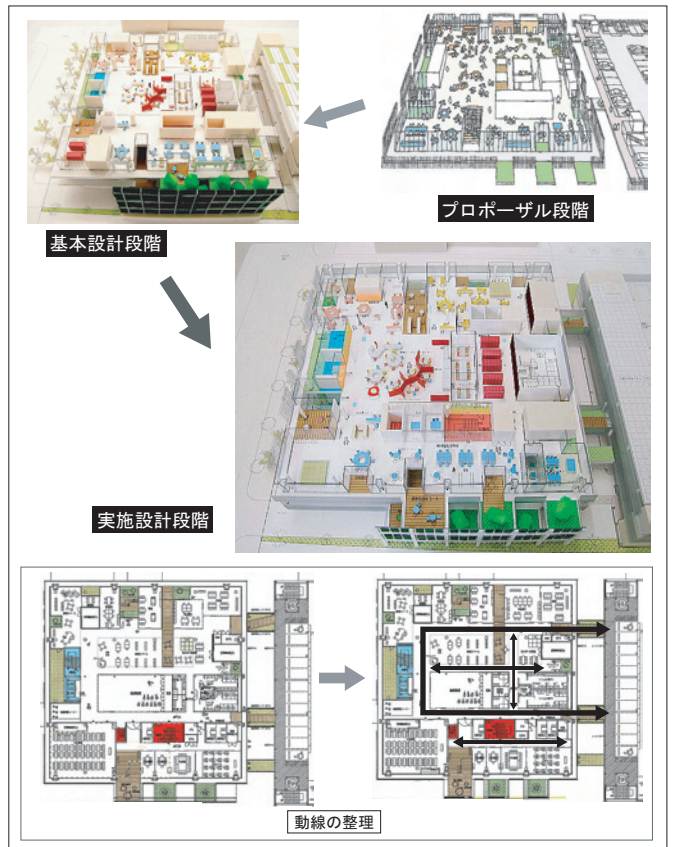


図2 設計過程におけるスパイラルアップ

表5 市民参加がもたらす効果

<p>運営へ継続する共通認識の構築</p> <p>地域福祉拠点のあり方を認識。 交流の場としての重要性を認識。積極的な活用方法を継続協議。 ハードだけに頼らない、ハード+ソフトの重要性を認識。 利用者主体の運営のあり方を協議。</p>
<p>ハード決定への効果</p> <p>オープンプランの使い方、可能性について十分な議論と変化。 使いガイイメージを共有し、より使いやすいハードへの展開。</p>
<p>プログラム決定への効果</p> <p>ニーズの再確認を行い、相談業務の充実等プログラムを修正。 市民の運営への関わり方の可能性を把握し、建築設計・管理主体へフィードバック。</p>

【謝辞】本論は、沼津市関係者および市民との共同作業のプロセスを報告するものであり、多くの関係者の協力の成果である。関係各位に深く感謝申し上げます。

* 株式会社久米設計 設計部長 工修

* Senior Architect, Architectural Division, KUME SEKKEI Co.,Ltd.,M,Eng.

** 東洋大学人間環境デザイン学科 教授・博士(工学)** Prof.,Dept.of Human Environment Design,Toyo Univ.,Dr.Eng.